



英国運河とビートルズ を訪ねて



田中 成美 著

プロローグ

初夏の色彩が日毎に強くなる5月中旬に、イギリスを訪問する機会を得た。思えば、イギリスに旅立つのは3年ぶりであったが、今回訪れるリバプールやバーミンガム、そしてペンザンスはどれも初めての地であり、イギリスの意外な顔を垣間見た思いがする。

特に、バーミンガムでのキャナルボートینگ(運河ボート)を3泊で体験できたのは、ユニークな、手応えのある、本当に素晴らしい経験であった。

この旅行に参加したのは、関西からさんとMさん、熊本からSさんと女性のKさん、それに私の(男性3人、女性2人)5人である。

この素晴らしいメンバー達のおかげで、貴重な人生の一項を創ることができた。ここにリバプールとバーミンガムでの体験を中心に、自分の目線で感じたことをまとめてみた。

拙い文章、雑な表現で書いていて自分でも気落ちするような内容だが、私達の旅をシェアしていただける事に、深く感謝したい。

H24.6.20



リヴァプール

～ イギリス鉄道の旅は快適 ～

ソウルで乗り換えてから、約12時間の長いフライトの後、やっと着いたロンドン。翌朝は早起きしてホテルの近くを散歩したせいか、疲れはすっかり取れていた。朝食を取り、午前10時ごろから、目指すリヴァプールへと向かった。移動手段はもちろん鉄道である。鉄道もこの国が発祥地だから、何かと興味をそそられる。

思えば初めてイギリスで鉄道を利用したのは、20年前になる。その時は国鉄が一手に引き受けていて、サービスが悪く、車内アナウンスも殆どなくて大変困った経験がある。知らない間に自分の乗っていた車両が切り離されて、目的地に着かなかった経験もある。

今は分割民営化され、約20社ほどの会社が参入しているようで、色々なサービスも以前よりずっと向上しているようである。駅のアナウンスも車内アナウンスも前に比べると遥かに細かくやっているようだ。

ロンドンのユーストン駅から、重いスーツケースを引きずりながら乗り込んだ私達は、まずスーツケースを車両の端にある所定の場所に置き、座席に座った。まもなく走り出した列車はすぐに、高速を出し始めた。イギリスの列車は意外と速く、新幹線に近いスピードが出る。車窓に流れる風景をぼんやり眺めていると、いきなり強烈な黄色い物が目に飛び込んで来た。

「ワー きれい！！」

思わず少女のような声を出して写真を取り始めたのは、Kさんだ。どんな小さな事でも美しいものに敏感に反応するKさんは、いつも元気潑刺である。その黄色い絨毯は、広い畑一面に植えられたナノハナだった。これはオイルを取るために植えているのだろう。この畑が何枚も続くので、窓に流れる濃い緑と強い黄色のコントラストが織りなす美は圧巻である。

しばらくすると、遠くの方に白い点々が模様のように浮かんで来た。羊の群れだ！

「ワー 可愛いー ！」

今度も真っ先に感動したのは、Kさんだった。

さて、この素晴らしい車窓風景を提供してくれる、イギリス鉄道の旅のもう一つの魅力は、運賃でもある。

私達が日本で購入したのは、「ブリットレイル パーティ パス」と言う4日間乗り放題の団体割引券で、今年はエリザベス女王の即位60周年記念やオリンピックがあるおかげで、プラス1日のサービスが付いていた。

合計5日間乗り放題のこのパスは一人あたり12,860円で、驚くべき安さだった。

丘陵の頂上まで続いている田園地帯をウツリと眺めていると、車掌が切符のチェックにやって来た。

イギリスでは改札口がない。乗客が乗り込んだあと、切符をチェックしに来るシステムだ。こういう昔のまま変わらない点も多いのも、イギリスだ。

「切符を見せてください」と、車掌が言うので、Sさんがバッグからパスを取り出して見せようとする、ちょっと見ただけでチェックもせず、ニコリとOKの手があがった。

「えっ、いいの？ さすが懐が大きい！」

と驚いてしまう。

その大きい懐に甘えて、4日どころか、イギリスに滞在する10日間を鉄道乗り放題の旅にしたらどうなるんだろうと、いつもの主婦根性が顔をのぞかせた瞬間だった。



教会の塔より眺めたりヴァプールの様子

～貿易で大英帝国の繁栄を支えた都市～

ロンドンから約2時間で私達はリバプールに到着した。終着駅なので、慌てることなく列車を降りた。

楽しみも、時間も中味が濃い個人旅行だが、旅行会社のツアーに勝てない点がひとつあるとすれば、それは「荷物の移動」だろう。全て自分達で重いスーツケースを持ち運びしないといけない点は、時として面倒で、重たくて嫌になってしまうことがある。

でも、イギリス人からすると別に気にかけることの程もなく、列車内にもちゃんと大きな荷物用の置き場が作ってあるから感心する。

時々、女性が大きな荷物に苦戦していると、イギリス人男性がさりげなく手を貸してくれたりする。今回もそれを期待したいものである。

リバプールの駅で重たいスーツケースに苦戦していると、さっと男性の手が伸びてきた。「来た！」と顔を上げて見ると、そこにいたのはイギリス人ではなく、関西から旅行に参加されたMさんであった。

「日本人男性も世界基準に近づいて来たな」という感じがして嬉しかった。

Mさんには旅行中、重いスーツケースをよく手伝っていただいて、決してか弱い女性ではないKさんと私だが、とても助かった。

さて、大きな荷物を駅の「手荷物一時預り所」に預けた私達は、さっそく市内散策へと繰り出した。

17世紀まで小さな港町に過ぎなかったリバプールは、アメリカや西インド諸島との貿易により、18世紀に大きく発展した。そして北アメリカ、西アフリカをむすぶ三角貿易の拠点として中心的な役割を果たし、主に奴隷貿易で急速に発展したとの負の遺産も存在する。

そんなリバプールも20世紀に入ると、大英帝国の衰退とともに経済不況が押し寄せ、町には失業者があふれ、活気はどんどん失われていった。

それでも、第2次世界大戦でアメリカ軍兵士の寄港地となり、軍事物資の供給港となったことで活気を取り戻し、見事に息を吹き返したのだった。

特に、ノルマンディ上陸作戦の直前には、述べ約百万人以上のアメリカ軍兵士が駐留していたと言う。

そんな浮き沈みをくぐり抜けてきたリバプールの明日を握るカギは、やはり観光業だ。不滅のビートルズはもとより、ここは本当に博物館や美術館が多い。

私達5人も、そんな博物館や美術館が立ち並ぶアルバート・ドックをゆっくりと散策し、ふらりと美術館、ふらりと博物館を訪れ、ゆっくりと時間を過ごした。

そして気がついた頃には、今日も静かに流れるマージー川に日が落ちる午後9時頃となっていた。

リバプールと言えば、ビートルズ。

私もビートルズは大好きで、特にジョンレノンの詩が気に入っている。

ビートルズが誕生した町、そして4人が生まれ育った足跡が数多く残る町...

それだけでも世界中のビートルズファンを惹きつけて止まない魅力がある。

青春時代の少なくとも1ページは、ビートルズ色に染まっている感がある我々5人が先ず目指した場所は、世界的に名高いビートルズ博物館、「ビートルズ ストーリー」であった。

イギリスは「シニア割引」が普及していて、ここでも60歳以上は約3ポンド(420円)ほど割り引いて入場できた。実は私自身は、まだ60歳までには後2年程あるのだが、「日本からわざわざ来たのだから、大目に見てね」と、厚顔無恥なお願いをして、他の4人と同じシニア料金にしてもらった。

今思い出すと、「日本人としてちょっと恥ずかしい事をしたな」、ちょっぴり反省している。

日本語オーディオガイドを片手に、その説明を聴きながら、展示物を見て回った。ビートルズ4人の子供時代から始まって、結成当時の様子、それから段々とブレイクして世界のビートルズになっていく過程、そして解散、その後の各人の活動等が、写真や資料、そして蠟人形等を使って見事に再現してあった。

その中で特に印象に残ったものがあった。

それは狭い部屋にタイプライターや書類、電話、その他一切の必要な物を詰め込んで、生き生きとエネルギーの満ちた様子で仕事をしている蠟人形の姿であった。

それは、リバプールの音楽関係に焦点を絞った新聞「マージービート」を発行した、ビル・ハリーである。

ジョン・レノンと美術学校で一緒だったビルは、それまで勤めていたチャリティ新聞の仕事を止め、一念発起して借金をし、ワインショップの2階の小さな部屋を借りて、音楽新聞「マージービート」を発行したのだった。その新聞がビートルズを大きく取り上げたのは、言うまでもない。第一号は5000部発行したが、アツと言う間に売り切れ、大成功。その後も発行部数を劇的に伸ばし、大成功を収めた。その後、その新聞はイギリス全土で人気博し、またその新聞でリバプールでのビートルズの成功も加速したようだ。

ジョン・レノンもこの新聞にコラムを書いていたらしい。

また面白いのは、このビル・ハリーが高手腕のマネージャーをビートルズに紹介し、そのマネージャーがその後の世界的人気のビートルズを形作って行ったと言う点だ。そしてそのマネージャーが、その後ビートルズ音楽の殆どをプロデュースした巨匠ジョージ・マーティンへと繋ぐ架け橋となったのだ。

世界的な不滅の人気を獲得したビートルズ。しかしその成功を勝ち取ったのは、本人達の天賦の才能だけではない。不良少年グループとして世間から疎まれていたグループの才能を理解し、それを潮流に乗せた若い夢に満ちた音楽ジャーナリスト、レコード会社に断れ続けながらも彼等の才能を信じて売り込みを展開し続けたプロデューサー、そして数多いレコード会社でたった一人だけビートルズの才能を見抜き、彼等の音楽をプロデュースしてレコードを作ったジョージ・マーティン。

いつの世も、類い稀なる才能はそれを見抜く人あってこそ、日の目を見るというのを教えてくれた「ビートルズ・ストーリー」であった。



ビートルズがデビュー前に演奏していたクラブ CAVERN

～ジョンレノン達の不遇な少年時代～

リヴァプール2日目の最大の楽しみは、ツアーを取ってビートルズに関係する場所を巡ることであった。

リヴァプール再開発地域を代表する一大レジャーコンプレックスとでも言おうか、ショップやレストラン、ホテルをはじめ色々な見どころがひしめく、アルバートドックへと向かった。

そこにビジターセンターがあり、2時間で40ポンド(約5000円、一人あたり1000円)のツアーを予約した。

10分ほど待つと、ツアーのタクシーがやって来た。

全員でワイワイ言いながら乗り込むと、20代後半から30代前半と思われる運転手&ガイドのお兄さんが、さっそくビートルズのBGMを流し始めた。

(ガイド)「ビートルズの誰がお好きですか？」

(私)「ジョン・レノンが好きです。」

(ガイド)「なぜジョンが好きなんですか？」

(私)「彼の歌詞が気に入ってます。また何と言っても奥さんの ヨーコ・オノは日本人ですから。」

このガイドさん曰く、自分はビートルズに関する本を80冊以上読んだそうで、ビートルズが生まれ育ち、彼等の思い出がぎっしり詰まったこの地の出身であることを、心から誇りに思っているようだ。

この「ビートルズのことなら何でもおまかせ」のガイドさんとともに、また北部英語の強いアクセントに苦労しながらも、ビートルズ4人の所縁の地を隈なく回ることができて良かったと思う。

歌にも出てくる銀行や床屋さん等がたくさん残っている、世界的に有名な通り「ペニーレイン」、元孤児院があった所で歌にも出てくる「ストロベリーフィールド」、ジョンが生まれた産院、ジョンとポールが出会った教会やジョンが演奏していたそのホール、ジョンが5才の時から預けられたおばさんの家「メディップス」、ジョージが生まれた家、リンゴが生まれた家、ジョンが通った小学校と大きくなってから通った美術学校...etc.etc

ビートルズの歌には慣れ親しんでいたものの、それぞれの生い立ちには疎かった私は、説明を聞いた時に「へー、」「ウ～ン」と唸ってばかりの感じであった。

そんな中でとても特に心に残った場所が二つあったので、ここに御紹介したい。

両親との縁薄きジョン・レノンのお話である。

ジョンは1940年に生まれている。

船の給仕人をしていた父親は、ジョンの誕生の時も不在であった。また、その後船を抜け出し行方不明になってしまう。

突然の夫の蒸発で、母親は途方にくれる。そして事実上、結婚生活がこの事件で終止符をうたれた。その時ジョンは僅か5才。ジョン・レノン自身も「僕にとって父は死んだのと同じことだった」と語っている。

まもなくジョン・レノンは母とも別れなければならない日がやって来る。母親が別の男の所へ去ったのである。ジョンは母親の姉のミミ叔母さんの家に引き取られることになる。

このツアーでジョンが預けられたミミ叔母さん家にも行ったが、叔母さんの経済状況は良かったようで、ビートルズ4人のメンバー中ではジョンの家は最も良かったそうである。また、この叔母さんはジョンに惜しみない愛情を注ぎ、精一杯育てたそう、その点はジョンは恵まれていた。

しかしジョンが18才の時に悲劇が起きる。

ある日、ジョンの母親はミミ叔母さんの家に、ジョンに会いに行く。その途中で、非番の警察官の車に跳ねられ、亡くなってしまったのだ。

ツアーはその事故があった道路にも連れて行ってくれたが、その道路はミミ叔母さんの家のすぐ近くで、本当に痛ましかった。

多感なジョンの悲しみはいかばかりであったろうと、今更ながら胸中察する思いである。

この事件はその後のジョンの人生に大きな影響を与えている。

もう一つの印象深かった場所は、ジョンの歌にもある「ストロベリーフィールド」である。そこもミミ叔母さんの家のすぐ近くにあった。荒れた野原が広がっている所に、ストロベリーにちなんで赤いゲートが立っている。元はここに孤児院があったそうである。

ある日、幼いジョンが叔母さんに言った。

「友達は皆パパやママがいるのに、どうして僕にはいないの？」

それを聞いたミミ叔母さんは、ジョンをこの孤児院に連れて来て、

「ここにいる子供達を見てごらん。この子達は皆パパもママもいないんだよ。あなたひとりではない。ここにいる子達はみんなあなたの友達だよ」

と諭したそうである。

ジョンもこの孤児院が気に入り、ミミ叔母さんとこの孤児院によく遊びに来たと言う。

ここがああの有名な歌「ストロベリー フィールド フォエバー」の舞台であり、ジョン・レノンの深い思いがこもった場所なのかと思うと、とても感慨深いものがあった。

そんな4人の所縁の地を訪れるツアーは続いていった。
他の3人のビートルズメンバーの生まれた家や育った所も見て回ったが、
それぞれハンディを抱えた子供時代だったようである。
それが後の成功へのエネルギーとなったのだろうか。

そんな事を想像している間に、ツアーが終わってアルバート ドックに帰って来た。
皆も疲れが見えていたし、私もアクセントの強い英語を聞き取って通訳するのに疲
れていた。

関西から参加していた Iさんが、
「ちょっとお茶でも飲んませんか？」

と可愛いげのある大阪弁で提案されたので、すぐ近くにあった素敵な雰囲気
の屋外ティールームで紅茶をいただくことになった。

眼前には静かに流れるマージー川が流れ、折しも美しい夕日が沈みかけていた。

まだ無名のビートルズ4人も、時にはこんな夕日を眺めて将来の夢を語りあったの
だろうか。



ペニーレイン通りにあるビートルズもよく行った床屋



ジョンレノンが生まれた産院にあったプレート

ドイツに演奏旅行に行った頃の楽器モニュメント



ジョンが育ったミミ叔母さんの家



ジョンが思索にふけったり、詩を書いたりした墓地



バーミンガム

～イギリス第2の国際都市～

リヴァプールから約3時間で降り立ったバーミンガムは、今でもイギリス第2の都市で、移民も多く多様性のエネルギーが漲っているように感じた。

ここでの目的はただひたすら、「ボートに泊まり込んで運河で旅する事」なので、翌日からの3泊のボーティングに備えるための買出しに行くことになった。

「どこで買い物しようかなあ...」

そう思いながら市内を散策していると、市の中心部にある大きな屋外マーケットに出くわした。

あちこちから、「チーズはいかが ！」とか「取立てのフルーツおいしいよ ！」とかの呼び込みが飛び交って来る。

「えっ、ここはイギリス？」と、疑いたくなるような雰囲気である。

イギリスのマーケットは何度も行ったことがあるが、だいたい静かに売っている。

しかし思えばここは、産業革命の一大拠点のひとつ。移民の規模も違うし、それだけ多様性に満ちていることの証しだと納得する。

実際、マーケットを見て回ると正にそれは、あたかも国際市場と言った感じであった。

ボート内の設備は完璧だと聞いているので、完全に自炊も可能なのであるが、そこは旅先である。やはり、「料理&後片付け」からは少しでも開放されたいと思うのは自然である。特にKさんと私は、日常的にも「女性であること」から来る役割分担はあまり果たしていないほうである。だから、ここイギリスでは尚更なのである。

また男性軍、特に関西から参加のさんとMさんは、「食道楽」を彷彿とさせるグルメで、

「ボートなんて狭いところで、ミチミチ食べるのなんてイヤヤ～」

と、憎めない大阪弁で仰るので、これは決まり！ 朝食だけの自炊で合意した。

そこで、朝食用の食材を買い出すことになった。

異国では、なるだけ珍しいものを食べたい。

まだ温もりが残っている感じのアヒルの卵、ガチョウの卵、現地のハムやソーセージ、本格的カマンベールチーズ、ゴーダチーズ、日本では高くて手がでないマンゴー、美しいマスカット、イギリススタイルの薄くカットしたトースト用食パンを2听ほど...etc,etc

フードの種類の豊富さも去ることながら、その値段の安さには驚いてしまう。その理由のひとつは、食料品や新聞、そして本にさえも、消費税(20%)がかからないことがあると思う。そう言う基本的な生活必需品に税金をかけようものなら人権問題にもなるというから、政治も動かすこういう庶民パワーは日本人も見習いたいものである。

～いよいよ運河でナローボート～

3泊分の朝食を主とした食材を買い込んだ私達は、ナンイートンと言う聞き慣れない田舎の駅で、ボート会社のお迎えの車に乗り込んだ。

10分ほどでボートのマリーナに到着した。

いきなり目に飛び込んだのは、20mをはるかに超えた細長い、名前の通りのナローボートであった。赤を基調にしたデザインで、これも本格的だ。

「これが私達の乗るボート?! こんな長いの運転できるん?」

と、さんがちょっと不安の声をあげた。

「まだちょっとボート内の準備をしておりますから、しばらくそのテーブルでおくつろぎください。ティはいかがですか?」

遠慮して「けっこうですよ」と言おうものなら、本当にティは出てこない英語の世界なのは体に染み込んでいるので、「はい、お願いします」とさりげなく答えた。

運ばれてきたティをいただきながら、眼前の運河に夢が広がる。

この運河はアシュビーと言う名前の運河で、周辺には素敵な村や古戦場などの見所が多く、またドックもなく初心者向けということで、ボート会社が勧めてくれた運河コースであった。

ナローボートは短いもので6mから長いもので22mのものがあるが、私達のボートは最長の22mのものである。

そもそも、この狭くて長いナローボートと呼ばれるボートとは何か。

その歴史は18世紀に遡る。このボートは産業革命を支えたエネルギー源の石炭輸送に使われていたのである。しかし、それはほどなく鉄道に取って代われ、衰退の一途をたどる。しかし、そのままでは終わらない。第2次世界大戦後、レジャー用としての運河の利用に注目が集まり、整備そして再開された。そして、今では私達のように多くの人達が、世界中から運河の旅を楽しみにやって来る。

ボート内の清掃が終わって、さあいよいよ乗船の時を迎えた。

マリーナのマネージャーの案内でボートに乗り込んだ。中に入った第一印象は、「わっ、狭い!」であった。それもそのはず、ボートの幅は2.1mしかないのだ。しかし、その設備の良さは一目瞭然で感心させられるほどである。

船首部分はサロン風になっていて、ソファとテーブルが置かれテレビもある。テーブルをかたづけ、ソファを倒すと、夜には2人は寝れる大きさのベッドにもなる。サロンから船尾に向かって、冷蔵庫からオーブンまでを備えたキッチン、シャワールームとトイレ、ダブルベッドがある部屋が二つ続き、もう一つのトイレと洗面所、その次の部屋には子供用だろうか、2段式ベッドがあった。

船内中にヒーターも張り巡らされており、「これは凄い!」と言わざるを得なかった。

それもそのはず、私達の3泊のボートの旅はこちらでは、「ショートブレイク(短い休み)」と呼ばれる。日本人からすると、3泊は決して短い旅ではないのだが、こちらではこのナローボートの旅の平均的な長さは1週間から10日間だそう。また、ボートを所有して、数ヶ月かけて旅する人もいるのだから、「生活ボート」の感さえある。

いよいよマネジャーの説明が始まった。

船内設備の使い方の説明が終わった後は、ボートینگのコースの説明が始まった。

「またひどいアクセント英語に悩まされるのかなあ...」とちょっと不安であったが、この男性の英語はわりと解りやすく安心した。きっとリヴァプールでのひどいアクセントに鍛えられたからだろうとも思った。でもバーミンガムはイギリス中部に位置するが、中部まで来ると、そんなにアクセントは強くないと言えるのかもしれない。

マネジャー)「この運河沿いにはボズワースと言う古戦場がありますが、歴史的な場所ですので是非行ってみてください。またこの村には素敵な手芸品の小さいお店やレストラン等もたくさんあって、面白いですよ」

さん)「パブはありますか？」

マネジャー)「パブ！ありますよ、ありますよ！この村のオールド ブラック ホースシューは 歴史があって美味しいですよ！ 他にはこの52番の橋の近くにライジング サンというのがありますが、ここもGOOD!!...」

このマネージャーもお酒が好きらしく、パブの話になると嬉しそうに話し始めた。グルメなお二人、さんとMさんも、それを聞いてすっかり安心した様子であった。

マネージャー)「皆さん大きなスーツケースをお持ちですけど、この事務所で預かってもいいですよ。中は狭いですから、必要な物だけを持って行かれた方がいいですよ」

Kさん)「でも、何か持って行き忘れたら、どうしようもないから私はもって行きたいなあ」

Mさん)「そやなー、でも皆の荷物合わせたら結構重たいけど、ボートは大丈夫でっか？」

マネージャー)「ハハハ、そんなの心配無用ですよ。だって車一台載せても平気なんですから！」

実際、ナローボートはその殆どが厚い鉄でできていて、かなりの重量に耐えられるよう設計されている。

それぞれのスーツケースも乗船させて、ビクリとも動かないボートに安心した私達は、船尾に行き、今度は運転の講習を受けた。

ナローボートのエンジンはディーゼルエンジンで、マネージャーがカバーを取って説明を始めたときに驚いた。「ISUZU」という字が目飛び込んできたからだ。ここでも日本の技術は活躍しているようでちょっと嬉しかった。

でもこの長いボートを、このちっぽけなエンジンが動かすのかと思うほどコンパクトだった。これはやはりナローボートのほとんどの部分が、居住部分になっているからで、エンジンが小さいだけ、歩くよりも遅いスピードでしか移動しないのだ。これぞまさに水の上を移動する「家」そのものなのだ！



私達が乗ったボートと準備をするマネージャー

～慣れるまでが大変な、ボート操縦～

ボートの使い方の説明が終わった後、マネージャーが言った。

「では、これからボートを運転してみましょう。皆さんの運転が大丈夫と思えるまで一緒にいますから、ご心配なく」

さっそく全員で船尾のコックピットへと向かう。

マネージャーが説明しながらエンジンを起こし、梶棒を動かしながら前進し出した。「船首が右に振れたら、梶棒を右に、船首が左に振れたら梶棒を左に回すんですよ... やっててください」

最初にチャレンジしたのは、Mさんだった。なかなか器用に運転している。

「Good Good!では、次にあなたやってみて」

と、今度は私に微笑みかけて来た。

「ヤバイ!」と思いつつ、梶棒を右に左にと動かしてみる。

「No, No こうですよ」と一緒に動かしてくれた。

一緒に動かしてくれる時はボートはまっすぐ進むが、自分一人で動かそうとすると、なかなかまっすぐに進まない。

次にSさんがチャレンジした。どういうわけか、何の問題もなくスムーズに進む。

「いったいどうしたの?どこかで練習してきたんでしょ」と言いたくなるような、上手な操縦だった。

「では、僕はそこの橋のところで降ります。皆さんはもう大丈夫ですよ。Have a nice trip!」

と言って、マネージャーは結局10分位指導して、そそくさと降りてしまった。

「ええ、もう!？」と言いたかったが、そこはイギリス、自己責任の国である。

「後は自分達の責任でお楽しみください」なのだ。これはボートと言わず他の全ての事について言えることである。

という訳でいきなり運河に放り出された私達は、自分達で運転をして前進する以外に道はなかった。

誰かが、「ま、最悪の場合はここで動かずに3泊してもいいね」と冗談を言ったので、皆で笑った。

そこで運転席に座ったのは最も上手なSさん、そしてエンジン係りをMさんがすることになった。

ボートは順調に前進していた。あまりに簡単そうなので、私も再チャレンジしてみることにした。ところが、ボートが左に触れ出したので、梶棒を左に動かしたのだが、うまくいかず土手の芦に絡んでどうしようもなくなった!

「Oh, No ! ! !」

SさんとMさんが逆噴射させたりして、やっともとに戻ったがかなりの時間を食ってしまった。

「すみませーん ! !」と言うより他なかった。

しばらくして今度はIさんもチャレンジしてみたが、結果は同じでやっぱり上手く行かなかった。次にKさんもやってみたが、これは上手く行った。運動神経の違いだろうか、今だに不思議である。

そうこうしているうちに、モタモタしている私達の横を、同じぐらいの長さのボートが追越して行った。お互いに「ハロー！」と言いながら、手を振った。

このカップルは何日間ぐらいボートに乗ってるのだろうか、ちょっと興味があったので尋ねてみた。ちょっと大きな声を出せば充分聞こえる距離をはしている、そこが運河の良いところだ。

「どれぐらいの期間ボートに乗られてるんですか？」

船首に立っていた奥さんがニコリとして答えた。

「うーん、もう7年ぐらいかな」

えっ、7年！

と言うことは、ボートで7年暮らしているということなの？ 実際、運河にはあちこちにボートが停泊しており、ボートの屋根にはプランターに野菜が植えてあったり、ハーブが植えてあったり、犬が飼ってあったりして、まさに運河に浮かぶ「家」の感じもする。

でも、この夫婦は定年退職して悠々自適の生活をおくっている年にはまだ見えない。50代後半だという感じだ。

でも、イギリスでは55才で退職する人も多いそうだから、この人達もそうなのだろうか。

これもまた今だに不思議である。

～水の上のスペクタクル～

ナローボート第一日目は夕方になって雨風が強くなったので、早めに停泊して船内で夕食を取った。

内部の設備は完璧なので、狭いとはいえベッドも気持ち良く、シャワーもOKで、外は嵐で相当寒くても、内部は快適な温かさ。美味しいワインやKさんのアイデア料理、そして会話も弾み、その後もグッスリ。おかげで全員が快適な朝を迎えることができた。

旅先では何故か早く目が覚める私は、ボートを降りて早朝散歩に出かけた。イギリスの運河の横には永遠とどこまでも続くパス(小道)がある。これは昔はエンジンの代わりに馬がボートを引っばっていたので、その馬道が整備されたものである。しばらくこの小道をゆっくりと歩いて行った。

運河の両脇に自生している木々からは、鳥の声がまるでジャングルにいるかのよう、美しくまた快活に、豊富に響いて来る。

右手の木々の向こうには羊牧場が広がり、緑の牧草に白い斑点が可愛らしく点在している。

左手の木々の向こうには、黄金色に輝くナノハナ畑が延々と広がっていて、緑と黄色のコントラストが実に美しい。

静寂の中の自然美に我を忘れていると、向こうから大きな白い犬を連れた男性が歩いて来た。

「Good morning !」 「Good morning !」

と、お互いにニッコリと挨拶を交わした。

後は何も聞かないところも気持ちが良い。

「この人もナローボートをやってるんだろうか？それとも、近くに住んでるの？」とか想像するのも楽しかった。

皆で朝食を済ませて、第2日目の出発となった。

昨日の失敗を踏まえて、運転とエンジンはSさんとMさんにお任せして、私は運河の風景堪能と決め込んだ。

歩くよりも遅いスピードなので、本当にゆっくりと景色を楽しめる。

今はちょうど運河に暮らす生き物達のベビーシーズンの様で、岸にはガチョウの親子やアヒルの親子がゆっくりと朝日を浴びている。

またしばらくすると、カモの親子が運河を泳いでいる。ボートにはすっかり慣れているので、全然怖がらないで近くまで寄ってくる。母カモにピッタリ寄り添って泳ぐ子カモの姿は、本当に微笑ましい。

しばらく行くと美しい白鳥のつがいが目に入った。

近づいてみると、このつがいも雛を持っているではないか。柔らかいグレーの産毛に覆われた雛たちの何と可愛いこと。白鳥のつがいやヒナをこんな近くから見たのも初めてであった。

自然の懐に抱かれたスローな水上の旅...こんなところにナローボートの魅力があるのだと、納得した。



運河に映る石橋

運河の周辺に広がるカントリー風景



運河沿いのフットパスを散策する人々



運河はちょっとしたベビーブーム

～運河沿いの小さな村々を訪ねて～

運河の旅のもう一つの魅力は、運河周辺の小さい村々を散策することである。また、運河沿いの村はどこも古い歴史があり、散策してても本当に興味深いものがある。そして、歴史のある、おいしいパブがあると聞きたいたので、長い距離のウォークに励みが付く。

特にここアシュビー運河には魅力ある村が点在していて、中でもマネージャーが勧めてくれたボズワースとヒックリーという村は特に興味深く印象に残った。

ボズワースと言う村には古戦場があると聞いていたので、訪れてみることにしたのだった。ボートを岸にくくりつけて降り、近くの古い石橋を渡り、村中の道を歩くこと約30分で、やっと古戦場らしき所に近づいて来た。しばらく歩くと、そこに小さな昔の井戸があり、何か説明があったので読んでみて驚いた！

その説明によると、

1485年にここで行われた戦争は、いわゆる「バラ戦争」の最期の戦いで、ヨーク朝の王をヘンリー・チュダーが破り、その後ヘンリーはヘンリー7世として国王に即位し、チュダー王朝を開いたのだそうだ。

そしてその井戸は、戦いに破れ、ヨーク朝最後の王となってしまったリチャード3世が戦いの最中に水を飲んだ井戸だったということだった。

また、ボートに帰る時に通った広い平原には石碑が建てられてあり、その銘板には

"Richard, the last Plantagenet King of England, was slain here 22nd August 1485"

(1485年 8月22日 プランタジネット家最期の王 リチャードはここで殺害された。)

今でも毎年、8月22日に近い週末には、「ボズワースの戦い」の再現イベントが行われるそうだ。

何も知らないで訪れたこの古戦場が、こんなにもイギリス歴史にとって、意味深い場所であり、高校の世界史の時間に習った「バラ戦争」の最期の舞台だとは知らなかった。

こんな意外性も、ナローボートの魅力の一つと言えそうだ。

もう一つ忘れられない村がある。それは、ヒンクリーと言う村だった。

マネージャーのお薦めのパブで夕食を取るべく、そこを目指して皆で歩いて行った。道路脇には大きくて古い家が並び、それぞれのお庭も「イングリッシュ ガーデン」そのもので、見事な花が咲き乱れる美しいガーデンが続いていた。

だいぶ歩いたところでお目当てのパブを見つけ、早速ドアを開けると、

「あっ、今日は日曜日だからもう4時に閉めたよ」

と、マスターらしき男性が言った。パブの中にはまだ数人のお客達がいて賑やかだったが、きっと入場が4時で締切りということなのか。

しかたなく、

「こちら辺りでまだ開いているパブはありますか？」

と尋ねてみた。

すると、ある中年女性が、

「この坂道をもう少し登って行くと、ひとつあるわよ。あなた達はどこから来たの？」

と、人なつっこい笑顔で答えてくれた。

「私達は日本から来たんですが、今ナローボートイングの途中で、近くの橋からここまで歩いてきたんです」

日本人のグループは珍しいらしく、気がつく私達の周りにはちょっとした人垣が出来ていた。

「そうなの！この辺は景色が良くて、良いところでしょう？」

「本当にそうですね。特に大きな家とお庭がとても綺麗ですね！」

「あの人はお金を持ってるからね。私達はお金ないけどね！」

と、皆と顔を見合わせて笑った。

私も笑いながら、

「へー、あの人はいったい何をされてるんですか？」

と尋ねてみた。

「だいたい弁護士とか医者や退職した人が多いけどね、まだ現役の人もあるよ」

「そうなんですか。で、パブはここをまっすぐ行けばいいんですね」

今度はちょっと若い男性が、

「そうですよ。ここをまっすぐ登って行って、突き当たったら右へ出て...。」

一生懸命に教えてくれるのが有難い。

「よかったら、これに地図を書いてもらえませんか？」

男性は喜んで一生懸命に地図を書いてくれた。自分達の村を紹介するのが、誇らしげにも見えた。

私が礼を言うと、「お役に立てて嬉しいです」と、本当に嬉しそうに、また誇らしげに言ってくれた。

お別れを言ってパブを出る時には、そこにいた人達がたくさん手を振ってくれて、「良い旅を！！」と、にこやかに言って送り出してくれた。

「ここがイギリス？」と疑いたくなるようなワンシーンだった。ややもするとプライドが高く、時として冷たいイギリス人のイメージを持っていたが、こんな素朴な温かさに出会うと、それも改めざるを得ない。

やはり地方に行けば行くほど人が良さそうに感じられるのは、どうも日本だけではないらしい。



古い家にはイングリッシュガーデンがよく似合う



大きい家と見事なガーデンが続く



リチャード3世が戦いの途中で水を飲んだ井戸

ボズワースは聖十字軍ゆかりの地でもあり、この日はお祭りがあっていた



リチャードが殺害された場所にある碑



その碑文

エピローグ

バーミンガムの後、私達はズーっと南の、陽光あふれるペンザンスに行った。そこでは、レンタカーを借りてドライブを楽しんだ。レンタカーのおかげで、「地の果て」を意味するランズエンドにも行けて、これもまた長年の夢を叶えることができ嬉しかった。ランズエンドは、眼前に広がるアイリッシュ海的大海原、そして断崖絶壁の海岸には強風が吹付け、陸には荒涼とした平原がどこまでも続いていて、心洗われる思いがした。

10泊のイギリス旅行は長いようで短く、短いようで長かった。時折自分の仕事や夫の事が気になりながらも、オリジナルなゆったりとしたイギリス旅行が出来て、本当に良かったと思う。

今回のこの意義ある旅行のアイデアを提供してくださり、色々な予約、またグループリーダーとしての役目を立派に果たしていただいた、Sさんに感謝を表したい。

また、関西から参加されたIさんとMさんには、大阪弁パワーで場を和らげたり、盛り上げたりしていただいた。

お二人の食とお酒へのこだわりから、いつにもまして御馳走の機会が多い旅であったことに感謝したい。

そして、心強い女性参加者のKさん、上手な車の運転、おいしい手料理、その他色々ありがとう。

また、12日間の休みを支えてくれた夫、そしてスクールの留守を守ってくれた先生達にも感謝、感謝である。

H24.6.20

田中 成美

*** 今回の旅の「フォトストーリー」をU-TUBEで御覧ください。
題名は「イギリスの運河とビートルズを訪ねて」です。こちらを[クリック!](#)**